

日本のオペラ 2023

石田麻子

はじめに

『日本のオペラ年鑑』の特徴は、日本のオペラにかかわる活動を悉皆的に記録していることにある。これまでも、国内での全幕オペラ上演や演奏会形式の上演はもとより、海外での国内団体の活動や日本人作曲家のオペラ作品上演といった情報に加えて、文化庁などの大型の補助事業などにも言及しながら、様々な形態で実施されるオペラ公演を収録してきた。

2020年以降、コロナ禍による大きな打撃を受けたオペラの世界で、新たな動きが生まれている。2023年4月に、(一社)グランドオペラジャパン(英文表記: Grand Opera Japan Association)が設立されたのである。同法人は、正会員の(公財)東京二期会、(公財)日本オペラ振興会、(公社)関西二期会、NPO法人関西芸術振興会・関西歌劇団、(公財)びわ湖芸術文化財団 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、準会員の(公財)新国立劇場運営財団の1団体により構成されている。

同法人の設立を受けて、今巻からはグランドオペラジャパンによる大型公演を軸に、日本のオペラ公演を捉えるような紙面構成に変更しており、さらに今後も編集内容を検討していく過程にある。しかし、各執筆者による原稿や基本的なデータ収集の枠組みや手順は変えていない。また、収集したデータはこれまでと同様の視点でまとめ、「数字でみる日本のオペラ公演2023」として収録している。

そして本稿は、新型コロナウイルスのパンデミックに見舞われた2020年版以降、刻々と変化する社会状況を記録するため、時系列

でトピックをとりあげる方法をとってきたが、2023年5月には新型コロナウイルス感染症が5類に移行して法的な対応が変わったことを受け、主催者別に公演の特徴を読み解く方法に戻している。コロナ禍前の2019年までと同様に、オペラ団体と劇場・音楽堂との公演制作の独自性と協働、その他の組織による公演状況についてなどを、記述していくことにする。

1. グランドオペラジャパンのオペラ公演

グランドオペラジャパンは、法人設立後の第一弾として、「2023 グランドオペラフェスティバル in Japan」と題し、2023年7月22日に滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール大ホールで東京二期会主催の《椿姫》を開催した。同公演をはじめとして、2023年度は正会員5団体による7演目が15の会場で16回上演されており、本年鑑が対象とする2023年12月までの期間には11回の公演がおこなわれた。東京二期会は、上記のほかに《ドン・カルロ》を札幌文化芸術劇場 hitaru(2回公演)と、よこすか芸術劇場で公演している(2022年度の堺市と山形市でのアートキャラバン事業《フィガロの結婚》は後述)。藤原歌劇団は、栗國安彦演出の《蝶々夫人》を八戸市公会堂大ホール、仙台の東京エレクトロンホール宮城(宮城県民会館)大ホール、前橋市のベイシア文化ホール(群馬県民会館)大ホールの各会場で上演した。さらに、《ラ・ボエーム》をフェニーチェ堺大ホール、レクザムホール(香川県県民ホール)大ホールで公演している。関西二期会は、《魔笛》を一宮市民会館で、《カルメン》を岡山芸術創造劇場 ハレノ

ワ大ホールでおこなった。これらの公演は、文化庁文化芸術振興費補助金「統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業（アートキャラバン2）」および「舞台芸術等総合支援事業（キャラバン）」の支援によるものであり、コロナ禍で打撃を受けた舞台芸術の世界への対応を機に生まれた地域巡回型の大型公演事業である。

上記よりも前におこなわれた令和3年度補正予算文化庁統括団体によるアートキャラバン事業は、パンデミック対策のための緊急支援だった。これを受けて**関西二期会**は、新宿文化センター大ホールでの《ドン・ジョヴァンニ》公演を、**関西歌劇団**は四国中央市市民文化ホール（しこちゅ〜ホール）大ホールでの《偽りの女庭師》をそれぞれ2023年1月に上演した。こうしてグランドオペラジャパンによるアートキャラバン公演は、コロナ禍で舞台芸術活動が沈滞した各地で、オペラ公演の鑑賞機会を提供した。

グランドオペラジャパンの正会員および準会員の主催公演は、各組織の特色を生かしたものだ。これらの多くが文化庁文化芸術振興費補助金を受けるなど、公的支援や民間支援を得て展開されている。**東京二期会**は、近年積極的におこなっている海外人材や組織との協働による大型公演が続いた。チームラボとのコラボレーションによる《トゥーランドット》はジュネーヴ大劇場との共同制作、ロッテ・デ・ベア演出の《ドン・カルロ》はシュトゥットガルト州立歌劇場との提携公演であり、海外の歌劇場との連携を通じて話題の公演を展開した。

日本オペラ振興会は、**藤原歌劇団**による国内人材を活かした《トスカ》《二人のフォスカリ》、**日本オペラ協会**の《源氏物語》《夕鶴》など大規模会場での公演を例年通りおこなった。**藤原歌劇団**はこれらに加えて、「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン」

と題し、テノールのジョン・オズボーンほかを招聘してロッシーニ作曲の《オテッロ》を2回、さらにオペラ・ストゥーディオの成果発表として若手歌手によるドニゼッティ作曲の《パリのジャンニ》を上演した（令和4年度戦略的芸術文化創造推進事業）。これらはヴァッレ・ディトリア（マルティーナ・フランカ）音楽祭との提携による国際色豊かな公演となり、藤原歌劇団の存在感を発揮した。

関西二期会と**関西歌劇団**も吹田市文化会館メイシアターや兵庫県立芸術文化センターを会場として、大規模な主催公演をおこなっている。

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールが《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を沼尻竜典の指揮で上演した。沼尻は、1人の指揮者が1つの劇場で、ワーグナーの大規模なオペラ全10作品を上演するという偉業を達成して、16年にわたって務めた芸術監督を退任した。10月には、びわ湖ホール声楽アンサンブルの現役メンバーや卒業生をキャストिंगした阪哲朗指揮《フィガロの結婚》を上演、新しく芸術監督に就任した阪へとバトンが渡された。

新国立劇場はグランドオペラジャパンの準会員である。大野和士オペラ部門芸術監督のもと、新制作舞台やレパートリーとなった舞台で、国際性や上演回数を確保、1997年の開場以降、日本のオペラ制作をリードしてきた。2023年の新制作舞台は《リゴレット》《修道女アンジェリカ》《子どもと魔法》《シモン・ボッカネグラ》を世に送り出し、話題となった。このほか新国立劇場は唯一の国立の歌劇場として、国内外への発信の役割も担っている。2023年は、「高校生のためのオペラ鑑賞教室」として《魔笛》をロームシアター京都で開催、札幌文化芸術劇場 hitaru での《サロメ》上演とあわせて劇場外公演をおこなった。加えて国際的な歌劇場のネットワーク組

織であるオペラ・ヨーロッパの運営する OperaVision への参加、YouTube チャンネル、オンラインでの配信「新国デジタルシアター」、NHK でのテレビ放送などで、鑑賞機会を国民に広く確保している。

2. 各地域でのオペラ制作

各地域でも定期的に様々な主催者によるオペラ制作がおこなわれている。中心を担うのは歌手などのアーティスト、高等教育機関の教員といった人々だ。彼らは、各地の文化会館や市民会館を舞台に、地域内外からの多くの力を結集して、公演を制作している。

その代表格が、各地の市民オペラだろう。2023年は藤沢市民オペラが50周年を祝った。園田隆一郎芸術監督が得意とするロッシーニの作品のうち《オテッロ》を演奏会形式で上演した。偶然にも同年1月に藤原歌劇団が海外からの大物歌手を招聘して同作を上演したところだったが、藤沢では役柄に合った声の日本人歌手をバランスよくソリストに配役して、市民のオーケストラや合唱と協働のうえ公演をつくり上げ、大いに成果をあげた。いまや藤沢はロッシーニ上演のメッカとも言える状況になってきている。

《アンドレア・シュニエ》を全幕上演したのは三河市民オペラだ。2公演を完売・満席にするのはこの団体の常である。市民が主催、制作する公演にもかかわらず、本格的な舞台装置や衣裳により、ソリストを務めたプロの歌手たちが市民合唱団とともに繰り広げたパフォーマンスは圧倒的で、会場を包み込む熱気は市民オペラの原点を感じさせてくれるものだった。

このほかにも多くの市民オペラが、コロナ禍を乗り越えて活動を再開している。

立川市民オペラ《カヴァレリア・ルスティカーナ》(セミステージ形式)、伊丹市民オペラ《蝶々夫人》、オペラ徳島《こうもり》、し

まね県民オペラ《ラ・ボエーム》などが全幕公演をおこなった。日本人作品の上演に取り組んだ団体には、和歌山市民オペラ協会の野々垣恵信作曲《清姫一渡し場の段一》、まつもと市民オペラの信長貴富作曲《山と海猫》などがあげられる。

複数の団体が上演活動を継続している広島では、広島シティーオペラ推進委員会が《タンホイザー》、ひろしまオペラ・音楽推進委員会の《フィガロの結婚》、広島オペラアンサンブルによる《マダムバタフライ》がJMSアステールプラザ大ホールで上演された。加えて、はつかいち文化ホール、府中市文化センター、三次市民ホール、広島大学サタケメモリアルホールなど、広島県内の各会場でも公演が開催されている。

和歌山県では、開場したばかりの和歌山城ホールを中心に複数のオペラ公演がおこなわれた。4月にはオペラシアターこんにゃく座が《森は生きている》を2回上演、11月は「紀州の民話をオペラに実行委員会」が對馬時男作曲の《紀州のタヌキと四国のキツネのともでも国替え物語》を初演、和歌山市民オペラ協会が前掲の《清姫一渡し場の段一》を上演した。この他、和歌山県民文化会館大ホールでウクライナ国立歌劇場の招聘公演《カルメン》がおこなわれた。

3. 劇場・音楽堂のオペラ

びわ湖ホールや新国立劇場の主催公演は既にとりあげたが、劇場・音楽堂の主催・制作による大型公演はこのほかの劇場も複数おこなっている。そのうちの一つに、「佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ 2023」と題した兵庫県立芸術文化センターの《ドン・ジョヴァンニ》がある。8回を数える公演の多さは例年同様であり、海外招聘者を中心とする組と日本人組がそれぞれキャスティングされた。

日生劇場は開場 60 周年の年を迎え、ケルビーニ作曲の《メデア》に加えて《マクベス》を制作、さらに東京二期会との共催で《午後の曳航》を上演して、いずれも話題となった。

上記《メデア》は 2023 年 9 月 1 日の岡山芸術創造劇場ハレノワの開場記念公演としても上演されたプロダクションである。同館は 11 月にボローニャ歌劇場《トスカ》、12 月には関西二期会《カルメン》を実施している。これら 3 つの大型オペラ公演を、間隔を空けて受け入れることにより、開場を祝った。

東京芸術劇場が中心となって展開している全国共同制作オペラは、毎回演出家に他分野の人材を招いた上演を特徴としてきた。2 月は《田舎騎士道〜カヴァレリア・ルスティカーナ》《道化師》のダブル・ビル。宝塚歌劇で多くの舞台をつくってきた上田久美子が演出した。年度がかわって 11 月の全国共同制作オペラは狂言の世界から野村萬斎演出による《こうもり》。毎年のことだが、いずれも異分野の交流という話題性もあって、客席に目を移すと明らかな観客層の広がりが見受けられる。オペラ演出に十分な経験を持つ人材ばかりではないため、制作側のフォローが必須となっていると拝察されるものの、どのような化学反応が生まれるのか毎年楽しみなプロジェクトでもある。

札幌文化芸術劇場 hitaru では、北海道在住者、出身者によるキャスティング、札幌交響楽団による《フィガロの結婚》を制作上演したほか、新国立劇場制作の《サロメ》を上演した。加えて、先述した文化庁文化芸術振興費補助金舞台芸術等総合支援事業（キャラバン）による東京二期会の《ドン・カルロ》も実施され、文化芸術振興費補助金舞台芸術等総合支援事業（劇場・音楽堂等機能強化総合支援（劇場・音楽堂等機能強化推進事業））を受けている館としての力をオペラ上演により発揮した。

この他にも、地域の拠点館の存在感を示す以下のような事例も生まれている。

「やまがたオペラフェスティバル」は、やまぎん県民ホール（山形県総合文化芸術館）で始まった企画である。2020 年 5 月というコロナ禍の最中に、山形駅前に開場した施設には、2,001 席の大ホールがある。同会場で、2022 年 12 月に日生劇場《セビリアの理髪師》、翌 2023 年 1 月には東京二期会《フィガロの結婚》、2 月に山形交響楽団（（公社）山形交響楽協会）の《ラ・ボエーム》（演奏会形式）と、美しいホール建築と音響を存分に活かした一連の公演がおこなわれたのである。さらに、同館の指定管理者みんぐるやまがたが主催する講座などともあわせて、フェスティバルと謳うにふさわしい一連のシリーズとなった。このほか、同年 12 月には全国共同制作オペラ《こうもり》が実施されている。

一方で、別団体による上演時期が近接したケースもあった。フェニーチェ堺では、2023 年 1 月に、堺シティオペラの定期公演《愛の妙薬》が 2 回おこなわれた。同公演は、フェニーチェ堺の大きな空間を岩田達宗の演出舞台が上手く埋めて印象的だった。そしてその 1 週間後に、東京二期会の《フィガロの結婚》が前述の山形公演と同キャストで上演されて、オペラ月間とも言えるような状況が生まれた。さらに同ホールでは、12 月に藤原歌劇団の《ラ・ボエーム》の公演もおこなわれている。

大規模な共同制作、単館での公演が華やかにおこなわれている中で、小規模ながら特徴のある舞台制作をおこなっている館もある。東京文化会館が、2 月にデヴィッド・ラング台本・作曲、笈田ヨシ演出で上演した《note to a friend》は、米国ジャパン・ソサエティーとの国際共同委嘱作品の日本初演だった。8 月には「Music Program TOKYO シアター・

デビュー・プログラム」で新垣隆《シミグダリ氏または麦粉の殿》、9月には「オペラBOX」で《Help! Help! グロボリンクスだ! ~エイリアン襲撃!!~》をとりあげた。これらは小ホールでの公演で、その規模は決して大きくないものの、制作の手順が複雑であることは変わらない。同館がコンスタントに取り組む多角的な舞台制作は、大ホールでの各オペラ団体の主催公演、招聘オペラ公演のみならず、バレエ、オーケストラの公演などとあわせて、舞台芸術の殿堂としての存在を確かなものにしている。

4. 招聘オペラ公演、音楽祭、オーケストラの活動等

2023年はコロナ禍で途絶えていた大規模な歌劇場の来日公演がおこなわれた。戦禍にあえぐウクライナ国立歌劇場の公演に始まり、イタリアからはパレルモ・マッシモ、ローマ、ボローニャの各歌劇場が来日を果たした。パレルモ・マッシモ劇場は、2021年と2022年に公演を予定していたが、その時はコロナ禍の拡大のため断念しており、2023年6月の招聘公演は、そのリベンジの機会となった。当初予定されていた《ラ・ボエム》のほか、《仮面舞踏会》(2021年予定)、《シモン・ボッカネグラ》(2022年予定)の上演は、《椿姫》へと変更された。

ローマ歌劇場は人気若手指揮者ミケーレ・マリオッティが全公演を指揮して、ソフィア・コッポラ演出の《椿姫》とフランコ・ゼッフィレッリ演出の《トスカ》を上演した。

ボローニャ歌劇場は、脇園彩が出演した《ノルマ》が話題となり、ウクライナ出身でバイロイト音楽祭での指揮などにより話題の女性指揮者オクサーナ・リーニフが《トスカ》を振って、各地を巡回する形態をとった。

日本ではオペラを核としている音楽祭は数が少ないのだが、いまやその代表格とも言え

るようになったのが**東京・春・音楽祭**だ。2023年は《仮面舞踏会》《ニュルンベルクのマイスタージンガー》《トスカ》をとりあげた。上演形態はいずれも演奏会形式である。海外から招聘した著名な歌手や指揮者を配した公演は、音楽作品としての凄みをダイレクトに伝えてくれる。このほかにも、《仮面舞踏会》は若い指揮者のための「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京」で、「子どものためのワーグナー」として《ニュルンベルクのマイスタージンガー》が、それぞれハイライトで公演された。これら、新進芸術家の育成と鑑賞者育成に寄与するプロジェクトでも、プライベートな音楽祭が一定期間オペラをはじめ多くの演奏会に取り組む稀有な事業となっている。第28回を迎えた**宮崎国際音楽祭**は広上淳一指揮の《仮面舞踏会》を演奏会形式で、**北とぴあ国際音楽祭 2023**は、寺神戸亮指揮によりラモール作曲《レ・ボレアード》をセミ・ステージ形式で上演した。

プロフェッショナル・オーケストラによる演奏会形式のオペラ公演も、毎年名演を生んでいる。すっかり定着した感があるのが、ジョナサン・ノット指揮の東京交響楽団と、チョン・ミョンフン指揮の東京フィルハーモニー交響楽団による演奏だ。いずれの楽団も、指揮者とのコンビネーションを活かして、例年歌手に海外の実力者を招き、重量級の演奏で聴衆の支持を得てきた。2023年は、**東京交響楽団**は《エレクトラ》を、**東京フィルハーモニー交響楽団**は《オテロ》を上演している。このほかにも鈴木優人指揮、パッハ・コレギウム・ジャパンによる《ジュリオ・チェーザレ》、下野竜也指揮、**広島交響楽団**《青ひげ公の城》、井上道義作曲・指揮・演出による**新日本フィルハーモニー交響楽団**《A Way from Surrender〜降福からの道〜》初演、柴田真郁指揮、**大阪交響楽団**《ルサルカ》、阪哲朗指揮、**山形交響楽団**《ラ・ボエ

ム》、広上淳一指揮、日本フィルハーモニー交響楽団《道化師》、高関健指揮、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団《トスカ》が上演された。沼尻竜典は《サロメ》を指揮、神奈川フィルハーモニー管弦楽団はセミ・ステージ形式で、京都市交響楽団、九州交響楽団はそれぞれ演奏会形式により上演するという3つのオーケストラ連動企画を生むなど、各オーケストラともに充実したラインアップの年だった。

愛知祝祭管弦楽団は、アマチュアながらワーグナーの「ニーベルングの指環」全夜上演に取り組むなど、これまでワーグナー作品を演奏会形式で取り上げており、2023年は《ローエングリン》を三澤洋史指揮で上演した。

大学等の高等教育機関、オペラ団体や新国立劇場が運営する研修所の発表公演もコロナ禍前と同様の状況へと戻ってきた。未来を担う若手人材の育成活動が本格再開されたことは喜ばしい限りである。

世界初演作もいくつか上演された。中でも国境を越えた事例となったのは、「日越外交関係樹立50周年記念 新作オペラ」としておこなわれたチャン・ミン・フン作曲の《アニオー姫 朱印船が結んだ玉華姫と荒木宗太郎の恋》である。9月22日～24日にベトナムのハノイ・オペラハウスで3公演のち、11月4日に昭和女子大学人見記念講堂で日本初演がおこなわれた。この舞台は、ベトナムでの活動が長い本名徹次が指揮、歌手の大山大輔が演出・戯曲・作詞（日本語）を担当して、日本とベトナムの歌手たちが共演する機会となった。

5. 劇場をめぐる動き

日本各地の文化会館や市民会館は、戦後徐々に整備され、それから現在に至るまで、大規模なオペラ公演会場の拠点となってきた。

たとえば東京文化会館、神奈川県民ホールなどでは、これまで数々の名演が繰り広げられている。このほか、オペラやバレエの上演を主たる目的にした多面舞台を備えた会場は、それら大規模な舞台のための専門性の高い劇場として1990年代以降に整備されたものだ。1997年開場の新国立劇場、1998年の滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、2005年の兵庫県立芸術文化センターなどが、自主制作公演を毎年世に問うている。

これらの会場のうち、とくに昭和や平成初期に整備された会館が徐々に修繕、部分改修、あるいは建て替えなどの時期に差し掛かり、それぞれ計画を発表し始めている。こうした動きが、大規模な上演活動をおこなっている団体や招聘会社の活動に影響を与えることは避けられず、代替会場の手配に苦慮する組織は多い。

「建て替え問題」がクローズアップされる時、とくに象徴的に語られるのは国立劇場だ。長年日本の伝統芸能の創造発信拠点だった国立劇場は、2023年10月に閉場して以降、2024年末の時点で、具体的な建て替え計画が発表されていない。あらたな計画が今後具体化していくものと考えられるが、空白期間は可能な限り短くしていくべきであることは疑う余地がないだろう。

国や自治体の文化政策において、芸術文化発信の拠点となる会場の状況変化は、創造活動に多大な影響を与える。加えて、その国や地域の顔となる「ランドマーク」でもあり、人が集まる場として各館が人々をひきつける力は強く、地域経済や社会を活性化させる場としての役割も担っている。とくに規模が大きく、注目を集めてきたオペラ公演は、相應の規模や機能を備えた会場があってこそそのものだ。また、そうした公演を支えるオペラ団体、歌手、技術者などやマネジメント会社の動き、さらに観客形成に関しても、拠点とな

る会場を軸に展開されていく。公演拠点の今後の修繕や改修計画は、日本で脈々と紡がれてきたオペラ公演の活動に直接影響が及ぶ事態となっている。

おわりに

2023 年は、舞台芸術の世界が再び活気を取り戻しはじめる年となったと言えるのだろうか。そう結論づけるのは、まだ早いかもしれない。しかし、パンデミックに対応するための積極的な国の施策や、舞台創造にたずさわる組織や人々の活動がおこなわれたことで、また歩みはじめたことは確かだ。

海外から来日して鑑賞する観客、あるいは海外で鑑賞する日本人の観客などの動きも再び感じられるようになった。こうした動きへの対応として、新国立劇場や大規模な公演を実施する一部の団体の公演では、日本語字幕のみならず、英語字幕も投影され、プログラムにも 2 か国語が併記されている。コロナ禍

を乗り越えて人々の動きが活発になる中で、観客のグローバル化への対応が必須となる時代がやってきたと言えそうだ。

国の枠を越えて来日する歌劇場、作品、指揮者や演出家、あるいは海外に出ていく作品などの掲載に加えて、国による大型の補助事業などによる文化政策の方向性の把握も、本年鑑でおこなっている。

このように本年鑑は、オペラからみた舞台芸術の状況、さらに舞台芸術からみた創造環境の動向や社会情勢を映し出す役割を担っている。それだけではなく、国内で展開されているオペラ上演が、どのように日本という国の枠を越えていこうとしているのかという点についても把握できるようにしてある。そのため、これまでの方針と大きく変更することなく、その収集と提示の方法を継続することに意味を求め、編纂事業を続けていく所存である。